

# 三河 アララギ

平成二十七年

三月号

第六十二卷 第三号



ニューヨーク日記(101) <http://blueshoe.copetin.com/>

**BlueCat, Shoe Lady**

November 21, 2014 : The Bowery Ballroom

## Blue Shoe Diaries

---



---

Quite an adventure getting to the show with @autumnrowe but once we got there I decided I like him a lot more now @heemsworth

Photo taken at: The Bowery Ballroom

# 目次

## 第六十二卷第三号(通卷七三五号)

表紙 春	今泉 由利 (1)	冬本番	夏目 勝弘 (26)
ニューヨーク日記(101)	Blue Shoe (2)	掛時計	阿部 淑子 (27)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)	無事を	白井 信昭 (27)
歌集「スモン」	大須賀寿恵 (5)	『ことよせ』	いーはとぶ (28)
寒の雨	岡本八千代 (6)	私の一首	近藤 映子 (30)
太陽	今泉 由利 (7)		杉浦恵美子 (30)
今年の初日	弓谷 久子 (8)		鈴木 孝雄 (31)
正月日和	青木 玉枝 (9)		林 伊佐子 (31)
◇飾り	内藤 志げ (10)	『俳句』	
時代の変遷	林 伊佐子 (11)	かさね吟行会	田中 清秀 (36)
全快を	安藤 和代 (12)	『酔いの徒然』(35)	丸山酔宵子 (38)
メタヤコイア	遠藤 脩子 (13)	ある自然科学者の手記(34)	大橋 望彦 (40)
次のまた次	伊藤 忠男 (14)	絹の話(52)	今泉 雅勝 (42)
母の形見	清澤 範子 (15)	短歌に詠まれた茂吉	鮫島 満 (44)
新玉	足立 晴代 (16)	楽しい時間(28)	山本紀久雄 (46)
霜花	富岡 和子 (17)	転載『月虹73号』	鮫島 満 (48)
百尺の影	鈴木 孝雄 (18)	転載『月虹99号』	保坂 征子 (49)
巖	森岡 陽子 (19)	梅	夏目 勝弘 (50)
未の正月	近藤 映子 (20)	「水魚」のことから(170)	岡本八千代 (51)
柿	半田うめ子 (21)	ことのはスケッチ(435)	今泉 由利 (52)
独り居	杉浦恵美子 (22)	『歴代天皇御製歌』(三十四)	貫名海屋資料館 (53)
茶釜	平松 裕子 (23)	編集室だより(二〇一五年一月)	三河アララギ (54)
大豆と糶を	山口千恵子 (24)	和菓子街道(101)	平松 温子 (55)
真夜	小野可南子 (25)	お知らせ・編集三河便り・三河アララギ規定	(56)

## 感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

ことしもまた忘れずに剪る如月の二十五日の柳の花を

P 1 6 1

鮮<sup>あた</sup>らしきものと脆くも折りとりぬ白き馬酔木の重き花房

P 1 6 2

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

指名さるるを待ちゐる大会々場にわれの唇乾ききりたり

足首の動悸しきりに感じをり暖冬にのびし麦なびきつつ

くらみ来し庭に向ひてゐし人のかはたれ時と一言いひき

## 冬の雨

蒲郡 岡本八千代

ひとりでに涙の出でくるこの夜よ一生けんめいすぎるわれかも

喧嘩しても夫婦めおとはいいなと思ふ夜妻に先立たれし独りの人に

よりかまはずより美しく老いたしと思ひつつけふも日が暮れてゆく

「悪のしくみ」なんていふ本読んだりしてわれの寒の日愉しからずや

何でもなき普通の日なれど気がついて神に捧ぐるこの寒の水

訪ねくる友を今かと待ちにつつ部屋に入りくる寒のそよ風

二人居て独りのごとく家の内まともや時雨るる寒の雨の音

寒の雨の音を聴きつつ本を読む侘びしきまでもこの静けさよ

寒の雨止みて黄金こがねの光りさすこの時わが手に受けし年賀状

松山の博物館長の先生よりああ賜はりしこの年賀状

# 太陽

東京 今泉由利

太陽をいで8分19秒光り集むる日向ぼっこよ

遮さへぎるは何ものも無し一直線太陽よりの今朝の日溜り

ゆつくりと崩壊に向かふ太陽系憂ひてゐたり五十億年先

一万度の光あまねしシリウスの頼もしくあり向ひゆきゆく

生誕は四百年の前にして足跡ぞくせきたどる四百年の

江戸明治大正昭和の偲ばるる大手門橋渡りゆくとき

鴨達なのどかに居たる景色にて昨夜鴨鍋食せしことを

浜離宮の今日の泥んこ濡落葉つきたるままの靴履いてゐる

一枚も葉っぱ無くして直ぐ立つる櫂とはじむ春への日々を

見慣れゐるはずの景色の見慣れない新幹線はひたに走れる

## 今年の初日

豊川 弓 谷 久 子

稜線と雲の間が真紅に染まる今し登るか今年の初日

訪ふ人も訪ひ行く先も無きままに静かな一日我の正月

親よりも深きえにしと看とり来し姉は逝きたり一月五日

年に不足無しと思へど空しさよ心の中に風吹き抜ける

残りゐる私の務めと今日も又逝きにし姉の跡片付けをする

我が食欲案じ呉れしか届きたるからあげ弁当まだぬくし

浄願寺勉強会の夢見たりしどろもどろの我が歌の夢

スエ先生と静誠様と友がゐて輪読したりき御津先生歌集

みさとより土産届きぬ東京駅の煉瓦型どりしカステラ菓子が

解きたる着物のほこり払ひて立たむ日脚伸び来し夕餉の仕度

## 正月日和

新城 青木玉枝

おだやかな正月日和もまだ続く紅梅の若芽春を待つ枝

朝食が終れば日課の散歩なり枯原ふ践みてひと日のはじまり

静けさの山里なれど正月は若き声あかりきく家の灯見て

正月の膳は立派な祝い膳食卓を前に笑顔の老人

自分から好んで出て来たこの始末今更帰ると言えない行為

帰りたいあの空港の見える部屋後悔の日び今更ながら

足をあげまだまだこんな元気なり続けていこう我が歳数へて

午前十時デーサービスティーの朝風呂足腰や背までやさしく介護士の手で

年老いて荘での明け暮れ湯けむりに包まれ湯舟に安らう一刻

色々と部屋の飾りを考へて折鶴五十羽鶴のれん作りて

## メ飾り

豊川 内藤 志げ

暮れ方に時止るごとく静もれる人も車も竹の梢も

寄せ植ゑの松の輪かのメ飾りお師の手作りわが手にて飾る

西光寺金山神社に砥鹿神社家族揃いて雪の舞う中

元旦のお昼に集うが慣しに夫を頭にうから十九人に

黒豆に昆布巻田作りきんとん嫁の手作り三日も飽かず

雪に堪え日射しあまねし黄清か正月三日日向葵の花

こころよく正月の留守居ひき受けり真黒黒に鍋を焦して

わが家も息子の家も琴子さんの主人が棟梁土壁の家

床の軸「忍豊安楽の道」新築祝に棟梁より頂きしもの

作業場のファンヒーターをわが向に外の二人に断りもなく

## 時代の変遷

岡崎 林 伊 佐 子

廃家が並んで残れるふる里は静寂とした時代の変遷

農仕事も休間期となるふる里は会う人もなく家にこもりぬ

落葉して疎林となりしひとところ山椿咲き赤く彩どる

えびえ立つ杉の大樹を仰ぎみる長間な風にも揺れ立ちてをり

風に舞ふ芒の綿毛も新天地めざして着地に根付きゆくらし

杭の上に止まりて尾を振る紋鷄われには見えぬ地虫食べをり

離村する時に植えたる杉ひのき売値は安く森となりゆく

祖たちの拓きし棚田も山と化り思い出はるかわが若き日おやも

「寒いのが」と挨拶をする三河弁の媪と語れば亡き父母しのぶ

古き家に帰り来たれば拘束を解かれし如く気ままに過す

## 全快を

豊川 安藤和代

全快をひと目ひと目に祈り込め夫に着せんとベスト編みゆく  
今日もまた八時に庭で啼く鳩を「母さんかもね」と孫は語り来  
バラ七十一本吾が手にあるは孫からの誕生日祝抱きしめて泣く  
綿虫のような小雪が舞っている犬も丸まり猫も丸まり  
冬萌のはこべ緑のその強さ教えられている元旦の朝  
拍手は拝殿深く響きゆく未だ明けやらぬ氏神の森  
孫子等の集うる時を待つ夫は鼻歌まじりで鬚をそりおり  
ひと口のお酒飲みたしと言う夫にお茶で乾杯も妻の愛です  
考えも背丈も吾を越す孫の帰りし部屋にそつと名を呼ぶ  
動くものひとつとなしの冬の野に遠く鉢巻の白菜の列

## メタセコイア

蒲郡 遠藤 脩子

生きた化石とふメタセコイア並木は紅葉してひたすら真つ直ぐ西尾へ続く

見下ろして始めて気付きぬ駐車脇のミツバカエデの明るい黄葉

廻り皆裸木となるわが狭庭楓幼木もみじ際立つ

雪のあとも黄葉著き葉の蔭にソシンロウバイの丸き蕾数多

三河富士砥鹿山に真向ひ走る助手席の供華は今朝摘み水仙

会へるかと思ふ一度の出合ヒトタビひ氣に掛かる姫

降りしきる雪の向かうに直立しウインターコスモス小さく黄の花

何鳥がいつついばむの崖際の大き赤実は一つぶもなし

ひとつつことをせねばせねばと気にかかり何もせぬまま一日過ごせり

手紙でも電話でもなくお会ひして直に真向ひ謝罪せねばと

## 次のまた次

大阪 伊藤忠男

東京と大阪行き来帰り道過ぐるふるさと霧雨のなか

人世はやり直せると人は言うだけど戻らぬあの日あの頃

次は君ときめき時に曲終わるフオークダンスの悔しい思い出

なほ途上あの日返らぬ20年受けた心の傷癒えぬまま

春の日に向かう日射しか温かなそよ風花の香かおりかすめる

変わらぬと声かけ笑顔思い出す去年も確か同じ言葉を

友と行く元気な姿初詣神に願うは次のまた次

世の常か近くて遠い国あれば遠くて近くに我が友がいる

歳とともに遠くが近く変わるのか年々はむ友との宴

誰一人寄せ付けずして身を守るなんと寂しや森の姫沙羅

## 母の形見

春日井 清澤 範子

低気圧にちよつぱり寒さ残りゐて母の形見のセーターを着る

副作用の症状深くなりつつも最善尽くそう命ある限り

広告の売り出し今日は葉野菜の安くなるを多めに買いぬ

杖を付き白山公園を歩きます夫と吾との幸せ時間

気持ち弱く少し悲しき昼さがり庭の椿の花咲き開く

朝陽差す小春日和の神社にて今さえづるはつぐみかむく鳥か

鳩も猫も居らず神社に詣でます宮の御幣がゆるるのみなり

夫が雨戸締めて廻りぬ東方に空高く半月吾を呼びたり

猫も居ぬ鳩も見かけぬ境内に夫に従ひ拍手を打つ

ひこばえの田は耕され広々と麦播く準備吾が歩く道

## 新玉

東京 足立晴代

初吟の声さわやかに澄みわたり寿ぎ祝う新玉の歳とし

雪衣纏いし山の美しくひとときわ高く富士の峯見ゆ

寒月の星なき空は冷えひびえと見上みあぐる吾も寒さひとしお

新たなる年を迎えて友人ともびとのすこやかなるとの賀状うれ嬉しく

浅草寺賑あう町を娘等と連れ立だち詣まいる歳の初めに

新玉の年を祝いて友人が集いさざめくひとときのよろこび

年重ね大寒の身に沁む寒さきびしく頑張われる吾は

大寒の右弦うげんの月の細々とふるえる如ごとく暗くらき夜空に

赤松の枝白々と雪積り初春の朝心新たに

外国とつくにの戦火の中に身を投とうじ母国わがわいに禍もたらすやも

## 霜花

東京 富岡 和子

おだやかに三ガ日往く町しづか今宵十六夜寒風さやか

式典や梅ほころびて青風を佇み笑みる振袖すがた

闊歩する姿なけれど優雅なり電飾何ぞ超高層に

スイッチをオンに押すのみ温りが湯タンポ愛でた母逝き十年

寒肥かんごえと思うばかりの冬籠りなまる体に天気図を読む

ギザギザに光るシルバー黒土を霜花シモバナに触る大寒入り

秋播きの菜花ふた葉の勢揃い寒中見舞投函のひる

パン脇にノートパソコン忙しくターミナルカフェオフィスと化し

天覧の初場所相撲晴ればれと観客と共テレビに拍手

まちまちに花店鮮やか週がわり臘梅ほのか豆まき待つ日

## 百尺の影

沼津 鈴木孝雄

大晦日三代揃つての夕食は話尽きず杯すすみけり

豊橋の雑煮はごった煮田舎風と家族は言えど我受け入れず

チャチャと小鳥さえずる沼津御用邸跡上のツバキも花咲き始む

夕陽受け百尺の影従えて冬の散歩はガリバー気分

枯れた実と葉を付けたまま臘梅が春を待てずか黄花を咲かす

今日はまだ大寒なのに海鵜ども西郷島に舞い戻りけり

初詣今年の厄の看板に高齢者の年は見当たらず

カモミール地上の茎根を張りのばし子供の衛星四方に育てる

寒霜で茶色にしおれたその下に三葉の新芽春をうかがう

小松菜にホウレンソウから大根葉拳句は春菊鳥に食われる

## 巖

東京 森岡陽子

苔むして巖いわおになりぬさざれ石赤坂の杜神社に鎮座

クリスマス愉快な事にあんみつにサンタが顔出すおまけ付きなり

昼寝時も白川夜船の母を見るつくづく思ふあの頃の姿

富士山に見立てし神社へ初詣ぐるり石段二十で頂上

冬空の澄みて冷たきその中を暖かき色花火光りて

雪の中黒い板塀古き町迎へる店の店主の素朴さ

小雪降る合掌造りの村歩く白川郷は国際化なり

手足伸ぶのんびり友と露天風呂遠くの山の雪はぼんやり

冬木立通り抜けする夕の苑人影はなく野猫横切る

一枚の葉も残らず庭の梅裸木覗く蕾微かに

## 未の正月

名古屋 近藤 映子

この年は夫亡き初の年の暮れ長男帰郷共に過ごせり

平成の二十七年を迎えたりケータイに写る孫の顔と声

筋無力症のわが手足それでも毎日少しのリハビリ

わが夫の快復祈願に始めたる折紙鶴は一万八千羽となる

早朝のリビングに置く真赤のシクラメンにすっかり目覚めり

十五日歌会始の「本」の題十首詠まれる時を共にす

わが右手筋無力症は甘く無し入れたつもりの力は入らず

寒さの続く未年それでも私は生きている三十一文字

従妹より寒中見舞いの届きたり寒椿の赤を絵画きて

わが夫の遺影をしつと見上げ見る線香上げる朝の一時

## 柿

新城 半田うめ子

松原の高柳様時々柿を多く下さいましたやさしき友

野田川に大きな魚のそよぎをりパンクズを少しあたへるなり

わが父の楽しみたりき桜の木切られたりき残念であり

さくみ様多くの鳥の居りたるも本宮山へ行きてしまひぬ

休ここの畑に生へしスイバーを取りて食むなり楽しかりけり

子供の頃スイバーを取りて食べる事楽しみたりき学校を休むも

## 独り居

蒲郡 杉浦恵美子

幸せがこんな処にあったとは竈から出立ての食パンひと山

パン屋にて焼き立てパンに出合ひたる小さき幸せそれだけでよい

街中のこんな時間に高校生そうか今日から三学期始まる

そのせいか年末年始は籠り居り流石に独りはもう飽きたほど

わが庭の白薔薇冬に狂ひ咲き人目も草もかれたる中に

独り居に慣れたるせいか雑談の家族の話に違和感おぼゆ

籠りたる訳など特にありはせぬ寒いし人に会うのも億劫

何だろう人恋しいしさればとてせめて会いたい人もいないし

お節料理の伊達上手く出来ましたわたしが全部食べるんですが

黒豆煮自信あるけどやめましたひとりじゃとても食べきれません

## 茶釜

豊川 平松 裕子

波の黒雲の黒空の黒分かたぬほどに夜となりゆく

石の門の傍に見しカンアオイその門に入るも今は稀なり

起きぬけに火鉢の灰をかき分ける火種探すが朝の慣わし

大き火鉢に掛けたる茶釜に触れてみる温もりあれば熾わきは残れる

火種乏しき今朝は小さき赤き熾わきに堅炭つぎ足し息吹き続く

かすかなれどチキチキと鳴る炭の音つぎ足しし炭に火は移りゆく

干し物を終へて入りたる部屋中に茶釜の湯気はふはふはと立つ

熱き湯気の立ちたる釜より茶杓にて湯をフィルターのコーヒーに注ぐ

ガラつけるこの竹の管はまさに四角四方竹なりと覚え言ひぬ

## 大豆と糶を

豊川 山口千恵子

西空に白々見ゆる春の月午後の冷めたき風吹きはじめ

風強き雨のち晴れの今日の昼五センチ程の麦の葉そよく

冬の雨一日降りたり休耕田土黒々と麦青々と

線香の煙をあとに帰りたり去年の如く正月二日

枝に刺すみかんめがけてメジロ来る鳴き声やさし二羽つづ揃ひて

枯れ庭を鳴きつつめぐるメジロ二羽大寒の空晴れ渡りたり

庭の木の赤き実すべて喰ひ尽くし小鳥は黒き糞を落しぬ

ジグザグにプランターに埋めしそのままにチューリップの赤き芽出でてきぬ

連日を大工仕事の音のして若きら働く楽しげなりき

潰したる茹大豆と糶を混ぜ合はせまるめて瓶につめこみてゆく

## 真夜

豊川 小野可南子

枯れ菊の一株大きく掘り上げぬ四肢をゆつくり伸ばす小蛙

真夜の空に雲しろじろと清かなり十日の月のこの耀きに

雲晴れて十日の月の煌々とまずオリオンを見あげむと佇つ

ゆつくりと来年となる鐘の音菩提寺までのこの真夜中の道

新年となりたるばかりそこに声はあたらし慶びの声

新玉の鐘の響きのこの余韻私のコートを膨らむる如

突然の眩暈めまいによろけへたりこむ人をぞ呼ばふ夫をぞ呼ばふ

携帯はかく有難し駆けつけて来たれる息子にただただ嬉し

メニエルならむもう大丈夫と気丈にも息子も帰し夫にも言ひて

リビングに明るき今朝の光あり耳が聞こえぬ左の耳の

冬本番

豊川 夏目勝弘

うすれつつ形くづれそして消ゆちぎれ白雲正月の空

向ひゐる窓をすぎゆくちぎれ雲同じ所にて消えてしまひぬ

バラの香の煙は千千に乱れつつ天井まではとどくことなし

たちのぼり乱れ消えゆく香煙の消えゆく先をただ見つめをり

我が庭に梅の花の咲きなばかの月ヶ瀬を歩みに行かむ

延べ段にふるるまでに撓ひゐるハランの広葉が朝日をかへす

木暗りに赤目立ちゐし千両の玉実もなくなり冬深みゆく

窓ガラス一夜鳴らせし風やみぬ遅き朝日の部屋に入りきぬ

声にせず木元竹うらと称へつつ太き青竹の割れる音よし

久しぶりの冷たき雨となりし庭細き流れの出来てきにけり

## 掛時計

横浜 阿部 淑子

思ひ出の掛時計の調べに送られつ友はホームへ移り住みゆく  
春並の陽気にうす着は束の間に寒波襲いて重ね着重く  
整頓がうまい秘訣は捨てることと言うは易いが愛着つのでりて  
テレビ見では変動激しい世の中に心のチャンネル切り換え難く  
犯罪をおかす若者後たたず心の幼さ知りてため息

## 無事を

豊川 白井 信昭

未知なれる火星に向けて打ち上がる「はやぶさⅡ」の無事を祈らむ  
見渡せる工業団地広々とソーラーパネルは整然と並ぶ  
台所の照明ひとつ今日よりは丸形LEDに取りて代われり  
山も野も田に畑に庭の樹々雪降る朝音ひとつなし  
恋いて来し恋路ヶ浜打ち寄せる波は穏やか正月二日

『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

寒き中よもぎ摘みたる指先に光の差して薄緑色

嫁ぎしより四十余年よくり返すよもぎの餅つきこの暮れもゆく

牧原規恵

炬燵には夫と我と猫も居て日曜の午後の静かに暮れつつ

しんしんと粉雪の舞ふ寒き朝福井に住まふ娘よいかがか

稲吉友江

この夕ベシヤンゼリゼ通り歩み行くまるでおとぎの国にゐるやう

夫と来てジベルニーモネの池の辺に粒々赤き水引の花

鈴木美耶子

新しき墓の除幕に夫と我白布外しゆく雪解けの朝

僧の読経響き渡りて新築のわが墓所に今日の陽光る

吉見幸子

言い合へば言い合ふほどの違いかも夫と吾との全面展開へと

みな集ひて白熱灯の下に居りき今はLEDの光りの下に

牧原正枝

娘と会ふひとときはやもすぎゆきてまたわれひとりとなりてしまひぬ

あれこれと思はず冬の陽にあたる春遠からじの光となりつつ

岩瀬 信子

一叢ひとむらの黄水仙咲けり藪のかけ師走の風に寄せ合ひて立つ

モコモコの赤き靴下おくられて今宵は心も体もぬくし

石田 文子

「絵羽織をベストにしたの」と弾む声ほほ笑む友は乙女のやうにも

上ノ郷の蜜柑畑のパイパスを東へ東へひた走りゆく吾

森 厚子

齒の治療待つ間の窓に光る海ひろごり見えて心しづまる

わが祖母の形見にくれし赤メノウ我に命の繋がり思ふ

山崎 俊子

真西風吹く三河の海のけふの波白白として往く舟もなく

わが庭の今年の黒松の冬みどりあざやかにして光りゐるかな

三田美奈子

冬の陽の射し来る中にひそやかに仄か薄紅の白菊の花

我に似て動きの遅きパソコンに向かひて打ちをり冬の日の午後

水野 絹子

## 私の一首

「天徳院功道淳心居士」と朝夕に線香上げ吾の安らぎ

近藤 映子

朝起きて洗面後に仏壇の前に線香を上げて手を合わすのが日課であるが、時には洗面前にすわり込む時もある。落ち付くからである。何故か理由などない。もう四十年程前父が亡くなった時の母の心持ちを今私も実感している。

本当に見えているのか父の顔覗いてみれば淋しき睫毛

杉浦 恵美子

『三河アララギ』平成十九年十一月号

父が亡くなる一ヶ月前、施設に面会に行った時を詠んだ歌です。「私の一首」に何を選ぼうかバックナンバーを探している時にふと目に留まりました。すっかり忘れていました。しかしあざやかに思い出されました。施設の部屋の佇まい、その時の私の悲しみまでも。短歌の僅か三十一文字では表現できないことも代りに、ある時を切り取ることができる力というものをしみじみ感じます。精進しなければと再認識いたしました。

## 視力落ちLEDに交換す読書意欲がよみがえりけり

鈴木孝雄

イルミネーションに広く使用されるLED（発光ダイオード）が照明用にも普及してきた。居間のシーリングライトの蛍光灯一本が寿命になったので、思い切ってLEDライトを購入。明るさが調節でき、調光も可能で、技術進歩にすっかり感心。

最近歳のせいか、すこし暗い所では文字が見づらくなつた。夜は本も一頁読むと、もう眼が疲れてしまう。ところが、明るいLED照明に変えたら、文字が鮮明に見える。読書意欲がよみがえった事を感謝して詠んだ。

## ふる里の友もいつしか後手を組む癖つきて農に励みぬ

林伊佐子

ふる里は、鳳来寺の西北にある過疎となつた集落です。林業や、農業では生活できなくて町や都会に出て行きました。米寿となつた友達夫婦が農仕事をしておられる。久ぶりに会って、後手を組みながらの農作業は、大変な仕事である。離村して四十年、田畑は杉木立になり、村の人達も高齢となり、時代の変遷をしみじみ思います。ふる里は、遠く離れても心に深く残っております。

『俳句』

潮の色濃き一湾の初御空

松本周二

乱文の賀状の人を気遣へり

元朝や鳥影ひとつある静寂

訪ふ人の影もまばらや鳥絵松

山元正規

啼く声の風に消さるる春の鴨

白息のぶつかり会へる通学路

午後の日を集めて白し花八手

今泉由利

藪椿惑星地球に紅く咲き

つつがなきことを言ひ合ふ初電話

寒月や笥かけひの湯へ身を寄する

川井素山

凍豆腐つるす老爺ろうやの指のひび

冬霞を浜ひびへ波切る夫婦舟

琴の音のロビーに充ちて二日かな

小柳千美子

朽ちはてし飼葉かいば桶おけあり枇杷の花

雪ばんば鎌倉街道晴れ上がる

打ち揃い玉砂利を踏む淑気かな

重野善恵

団欒の卓上包む初日かな

空っ風吹き抜けてゆく富士仰ぐ

冬日向ふとんの縁へりに雀をり

森岡陽子

年神を西方向いて迎へけり

眼裏に愛犬甘ゆ冬の夕

年取りて一年の計つつましい

柳田皓一

裾野よりパワー溜めこむ雪の富士

神木に両手まはして初詣

S Lの白煙被る冬の草

和田勝信

S Lの冬ざれを裂く汽笛かな

工場の冬日に錆ぶるパイプかな

困はれて明るくなりし冬牡丹

植村公女

雛展こころやさしくなつてをり

煙突の煙まつすぐ冬うらら

筆浸す硯の海の淑気かな

小池清司

初市の唐辛子売よく喋り

初場所や出世に鬻の追ひつかず

日向ぼこして雲とあり水とあり

伊藤柏翠

見下ろしてやがて啼きけり寒鴉

高浜虚子

鴨の中の一つの鴨を見てゐたり

高浜虚子

かさね吟行会

「浜離宮恩賜庭園」 一月

田中清秀

雪吊に三百年の松守る

由利

平成二十七年一月二十七日、かさね吟行会の初句会が浜離宮恩賜庭園で開催された。参加者は川井素山、山元正規、柳田皓一、今泉由利、森岡陽子、小柳千美子、山迫京子、と筆者の八名である。

当日は夜来の雨が上がり日差しが心地よいまさに冬日和の一日であった。大手門を抜けると目前に地を這うような姿の三百年の松がまず出迎えてくれる。続いて園内には広々とした芝生の庭園や花木園、将軍が鴨狩を

楽しんだという鴨場、海の水を引き込んだ潮入り池の大泉水、その真ん中にある中島の御茶屋など由緒ある大名屋敷の面影が一体に残っている。素晴らしい庭園の景色に秀句の期待が高まる。

遠近に昨夜の雨あと春隣

正規

元々この地はアシの生い繁る将軍家の鷹狩りの場であったのだが千六百五十年代甲府宰相松平綱重が別邸として造園し、その子綱豊が六代将軍家宣となり名を浜御殿と変え大きく改修され景観が整えられた。その中でも二つの鴨場は規模が大きく、また、竹笹でできた小のぞきは昔の網で鴨を掬い取るという猟法の仕掛けを今に残している。明治維新以降は宮内省所管となり新たに皇室の浜離宮として迎賓や謁見の場として大いに利用された。昭和二十一年東京都に下賜、恩賜庭園として公開された。

寒椿揺らす小鳥の枝移り

皓一

潮交じる池の歴史や春近し

陽子

春近し、春隣、冬ぬくしなどみな冬の季語、寒さが残る中に近づく春の喜びがこめられている。今回もいくつ

か使われており季節感が漂う。三寒四温は三日厳しい寒さが続いたあと四日間やや寒さがゆるむという気象現象をいう。他にも日脚伸ぶ、春兆す、春めくなど寒い冬にあつて春の訪れを心待ちする感情を表す季語がある。俳句を作るには良い季節となつてきた。

新しき茶店の暖簾春隣

清 秀

潮入りに掠める魚影春近し

素 山

今の時期は花が少ない、それでも雨あがりの水滴が日に輝き早梅の紅がほころび冬萌えの緑が目を引きそして池端の水仙も咲き始めているのが見受けられる。冷たい風の中にも迎える春の息吹を僅かに感じられる景色である。

日溜りにこぼれて淡し冬桜

千美子

青空をキャンバスにして濃紅梅

京 子

句会は散策と昼食を済ませ庭園内の芳梅亭で行なわれた。囁目五句出しとなり直ぐに出す人もう一度庭園各所を思い出し吟じ直す人など、それでも何とか全員の句が揃う。披講の後五句選となる、四点句が三句、二点句が七句以下一点句十五句と続く。お互いの良し悪しを忌憚なく述べ合いさらに技量を高め一層の研鑽を重ねていく。暮れぬうちに次回武蔵小金井公園での再会を期して本年最初の句会はお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 2015年3月27日(金)

場所 飛鳥山公園

集合 JR王子駅 中央口 11時

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

## 『酔いの徒然』（三十五）

丸山 酔宵子

### 『痛風予備軍』

戦後生まれと言っても、もう戦後70年。「・・・俺の休肝日はビールだけど・・・」と豪語して、一年365日、只管（ひたすら）飲み続けているのだが、昨今肉体的に自信を持っていたわが身に、異常が発生したのである。

先ず第一が、今夏、小樽港から電車で、今話題のニツカの故郷余市に行く際、交差点が赤にならんとし、小走りに突然走った瞬間くるぶしに激震が走ったのである。「ア・・・イテテ・・・」と足を引きずりながら東京に帰って、行きつけの整骨クリニックで見てもらえば、残酷且つ冷淡にも写真を見せられ「骨折です！」。さらに、「マラソン選手やサッカー選手であればこのような疲労骨折はあります。貴方のような軟弱な方の骨折は尋常であります。

せん。悪性腫瘍の可能性ありますので、MRI検査してください！」と即座に検査。恐る恐る検査すれば、別に悪性腫瘍は無く単なる骨折で、リハビリで現在はやつと正常に復帰。

第二は ある日、水代わりのビールを飲むとしても呑めないだけではなく、夜中、吐き気を摸様し、胃にあるすべてを吐き出し、胃液まで、朝までムカムカした吐き気状態。隣のベットで口を半開きにして鼾をかいて爆睡している愚妻に分からないように、音をたてないように、トイレとバスへの往復である。もし愚妻にその状況を知れたら、「それ見たことか！」と何百倍になって罵倒のパンチが浴びせられるのは明らか・・・。

年に2回の健康診断が3ヶ日後で、こんな状態での健康診断では、即入院か間違いなくドクターストップであるろうと、その日から3日間一切のアルコールを断って検査に臨んだのである。血液4本、尿検査、エコー検査など。一週間後主治医に結果を恐る恐る聞きに行くと、い

つもより厳しい面持ちで、カルテをおもむろに見ながら、「ア・・・別に何も問題ありませんね。ただ尿酸値が高いだけで、後は全く問題ありませんよ・・・」「エ・・・

尿酸値が高いということは、痛風になる可能性が高いということですか」「それはそうですが、プリン体の多い食品は控えてください。特に小さな卵で出来ている食べ物・・・キャビア、数の子、海鼠腸（このわた）なんかは止めてくださいよ。其れとビール！」「エーッ！ビールもですか・・・其れは、はつきり言つて酷ですネ・・・」

ビールは毎日いついかなる場合でも、「先ずビール！！」でスタートし、あとは食事によつてワインとか、日本酒とか、焼酎とかにしている、ビールが無いと楽しい食事が始まらないのである。「あなたの尿酸値は7.5程度ですから、ビールはある程度いいでしょうけど、飲み過ぎはダメですよ」「はいはい解りました。有難うございました。」

取り敢えずひと安心して病院を出たが、いずれにして

も、無理がたたつて、ガタがきていることは事実。しかし、朝は二日酔いで、今日こそ禁酒だと決意しても、夕刻になると、つい・・・。

### 数の子を食べて気にする尿酸値

木枯らしに暖簾が揺れる二日酔い

### 酔宵子

## ある自然科学者の手記 (34) 大橋望彦

## 「南部落ち」

其の年も暮れ、明治三年となりますと、御殿様は南部斗南三万石に御国替えになりました。『会津三万石の大藩から、僅か三万石の斗南藩に成り下つては、とても皆を連れて行く訳に行かぬ。心ある者は参れ、亦、都合で残るとも随意に致せ』と、御殿様の有難い仰せで御座います。お暇を願う者もあり、また、お供をする者もあり、色々でありましたが、我が家では、その行先は如何なる処にせよ代々御高恩を受け、その上父は、御馬前で討死にしたほどの関係（御馬廻りの任は、藩主の護衛の役と言われ、後馬前で討死した程とは、藩主の御傍使いをさせて戴いた上での討死、の意）であるからお供せねばなるまいと決まりました。

お話しは少し前へ戻りますが、父の遺体は藩主により、他の戦死者と一緒に、城下の七日町阿弥陀寺へ改めて、厚く葬られました。代々の墓所は、東山村の満松山天寧寺でありました。愈々郷里を立ち退き、遠方へ移るようになりましたので、戦死の時の鏡の片割れを此の居所に埋葬し、「忠勇院殿天外儀劍居士」の法名を刻んだ石碑を建て永代供養を住職に頼み、住み慣れた土地を離れる仕度に取り掛かりました。

さて、妹のおのぶの始末をどうするかが問題です。何分一年後・六ヶ月の乳飲み子、里に残して参るのも氣掛かり、されど乳離れせぬ子を永の道中連れられるのも難儀、ホトホト困りましたが、どうにか成ろうと、遂に決心し、連れて行く事と致しました。養子に致しました分家の小太郎は、未だ幼若であるので、そのまま分家に置いて行く事に成りました。出達は、八月の末、越後の新潟から蒸気船に乗って行くのです。新潟までは四十里の山道。老人子供連れの道中は難儀と思し召され、上からだれ駕籠が二梃渡りましたので、歩行には困りませんが、宿に着きました、乳の無い子供を抱えての苦勞は一通りで御座いません。只今と違い、牛乳ミルクの様な物もなく、粥を煮て食べさせながらやっと、三晩程泊りを重ね無事新潟へ着きました。

上から下される宿料には限りがあつて、同勢全部が旅館ばかりに泊まり兼ね、私達は運悪く寺町の寺院を宿所に当てられました。それも、一つのお寺に、百名も泊まるのですから、詰詰め同様に御座います。その上汽船の都合で、出帆が延び延びになえた、逗留が長引きましたので大騒ぎ、殊に朝夕の賄いは大変です。ご飯は桶に入れ、汁は手桶へ、膳の代わりに板を並べ、その上に茶碗が二つ載せてあるだけで、咎人でもこれ程ではあるまいと思われる程で御座います。食べ物不足から、飢じさに耐え兼ねて、日和山付近の畑へ参って、芋を掘り取り、焼いて食べたことも御座いました。誠に見下

げ果てたと思し召しでありましようが、生きる為には致しかたなかつたので御座います。

九日目にやっと、握飯に御餅が渡され、浜辺に着きましたのは、朝の四ツ時（午前十時）頃でありましたが、一船に凡そ千人も載せますので、舢二・三十艘では中々間に合いません。私共一行は老人子供ですから、他の者に追い越され、やつと七ツ時頃（午後四時頃）舢に乗る事ができました。本船迄はかれこれ二里近く、日の暮々に着きましたが、舢の中で殆ど船酔いをしてしまい。病人同様に成って仕舞いました。

本船と申しましても昨今の様な大きな船では御座いませんので、それに千人も詰め込んだのですから、船室も甲板も足の踏み場も無く一杯で御座います。五ツ時頃（正午頃）になつてやっと出帆致しますと、誰やらが、佐渡ヶ島が見えると申しましたが、立ち上がって見る勇氣も無く、唯、打ち伏したまま、物思いに耽つて居ました。その日は誠に穏やかでありましたが、何分多勢の乗客、女子供の泣くもあり、叫ぶもあり、其の騒がしさで、眠る事も出来ません。

途中お話しする程の事も無く、海上も無事にその翌々日の朝六ツ時頃（?）、南部の野辺地と申す処へ着きました。又、ここでも舢が二・三十艘も出ましたが、前と同様先を争つて乗りますので、舢は度々傾きヒヤヒヤさせました。私共は又々一番後になり、上陸した時は日暮近くで御座いました。浜辺の役所の様な所でその夜の宿割りを貰い、町名は忘れま

したが、三ツ星印渡辺と言う商家に泊まり、故郷を出で始めて家らしい家に疲れを休めたので御座います。此の三ツ星と申す家は、中々の大家で蔵が五戸前も御座います。この家へは、五・六十人も泊まりましたが、何故言うわけか私共を、別段に親切に扱つて下され、私を可愛がつて、菓子よ、玩具よと大層ご好意に預かりました。然し此処にも長居は出来ず、北の方十四里歩ある田名部という所へ行けとの事で、家の主人へ暇を告げ、色々御礼を申し上げますと、御主人は『是非光子様を貰いたい、どうぞ当家の子供にして育てたい』と、真心こめて仰います。元より知らぬ土地ではあり、手放せない子だからと断りますと、『詮めて、一月でも好いから当家にお預かりし、お住まいの定まり次第、当方からお届け致したい』と、誠に親切に申されましたが、これもやつと振り切り様にお断りして出立致しました。

やがて雪が降り始めまして、海から吹きつける寒風が肌を刺して耐えられません。この土地には、かごが無いので、馬に乗りましたため、一層寒さを感じ老人などは、凍え死ぬのかと思われる位で御座います。然し、漸うの事で、横浜と言ふ駅へ泊まり、翌日田名部の『菱千』という宿屋に着き、この町に落ち着けるものと、一安心致しました処が、之も束の間『此処には、役人の他は住まうこと叶わず、近在の村々へ小分けして、夫々居住せよ』とのお達しで、私達は、此処から五里程離れた鳥沢村へ参るようになりました。

## 絹の話 (52)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

## 絹と渋沢栄一

## 【江戸後期の日本の絹】

日本の絹産業は江戸中期の文化文政以前は中国から絹をオランダ船を通して大量に輸入し、流通小判が不足し、幕府は財政改革に乗り出さねばならない事態になっていました。そこで幕府は白糸の輸入制限を始めたのですが、中国の糸に頼っていた京都西陣の高級絹織物業者が原糸不足に悩み、国産の上質白糸を全国に求めました。それに呼応したのが、稲作に向かず、代替作物に乏しい、水利の良くない土地の広がる信州、関東、奥州の各地でした。上質な繭を生産するため必死の競争が、養蚕農家と蚕種製造農家が分離すると云う業態を産んで行くのです。蚕種業は高利潤が得られたので多くの事業者が乱立し、競って蚕種や蚕室の研究をし、自家蚕種を養蚕農家に売込む為、蚕種代金は翌年蚕種を売込む時に集金すると云う金融的な事も発展し、急速に繭生産が増大して、西陣の要求に応えられる様になりました。ここに日本の絹が世界制覇をする基が出来るのです。

安政五年（1858）幕府が鎖国を解いて横浜など五

港を開港すると、ヨーロッパ全域で微粒子病蔓延による蚕の死滅と中国（清）がアヘン戦争の混乱で絹の輸出が思う様にならない事情が重なり、ヨーロッパはフランスを中心に生糸不足に陥っていましたので、生糸がまたたく間に輸出の首座を占め、次いで無病の日本の蚕種を買い入れて、再度繭生産を図ろうとするヨーロッパ各国に蚕種が飛ぶ様に売れたのです。蚕種業者は超豪農に成長して行くのです。これは日本の絹が世界に羽ばたく天佑とも云える好機になり、日本の資本主義経済の基礎が出来上がって行くのです。

渋沢栄一はこんな時代に血洗島村（現深谷市）の藍等も扱う蚕種豪農の家に産まれたのでした。

## 【江戸末期蚕種に関わる尊王攘夷】

開港して数年もすると蚕種のおびただしい輸出で養蚕農家に蚕種が回らない事態が起き、不良な蚕種も出回り国内外とも混乱が起きていました。幕府は1864年蚕種の輸出を制限すべく、蚕種改印令（代官所に税を払い、蚕卵紙に押印したもの以外は、流通を禁ずるもの）現在の印紙の始まり）を出し、同時に幕府財政の補填を図ろうとしました。それに反対して奥州、信州に一揆、上州、武州に世直し一揆が同時発生しました。これは奥州系と上州系種業者の覇権争いでもありました。

洪沢栄一は上州派をまとめて自案の訴状を代官所に出して、長年にわたる奥州派との蚕種の確執を有利なものにし、その手腕による名声は揺るぎない物になって行きました。地縁による商売を通して、桜田門の変を起こす水戸藩士との交流もあったので、この一揆が京都からは、奥州関東の尊王攘夷運動の一つに見えた様です。

### 【洪沢栄一の出世】

洪沢栄一は尊王攘夷運動に加わるべく、従兄弟と京都に上るのです。関東出身の新撰組の上層部とも地縁から旧知が多く、身の安全と情報収集に有利であったと思われまします。ところが同志に避難されながらも旧知の一橋家の用人平岡四郎の奨めで一橋家に出仕し、士分となり、経済、兵制改革に奔走するのです。

慶応3年（1867）徳川慶喜の弟、昭武を团长とするパリ万博行きの書記会計役として随行し、ヨーロッパ各国の最新鋭の兵器、軍備、科学的産業を見て回っている時、大政奉還となり、急遽帰国し、静岡に蟄居していた慶喜の元に参上して静岡藩士になり、遊学時代に学んだ銀行、会社運営等諸事業を盛業に導くと同時に農民出身として、農業振興にも尽力しました。

その手腕を認めた佐賀出身の大隈重信は明治2年前島密、五代友厚、洪沢栄一らの開明若手を民部省（現・経

産省と国土交通省を合わせた様な役所）に集め、民部省と大蔵省を合併し、勸業推進、民業奨励の殖産興業を強力に推進する為の組織人脈を構築するのです。

明治になっても蚕種の輸出は活発でしたが、粗悪品の横行に手をやいた政府は、蚕種の粗悪品を取締まる改所を設け、輸出には税、無改印の物は没収と云う策を練りましたが、諸外国の自由貿易の主張と、外務省の不平等条約による反対でこの安は実施に到りませんでした。洪沢の「取締まるばかりでなく、政府が養蚕を奨励し、蚕種、生糸の規格、品質向上に努め、殖産興業を図るべし」と云う方針に転換し、政府の直轄地で洪沢の養蚕人脈が発揮出来、繭の集散地でもある富岡に官営工場を建設する事になりました。

明治3年洪沢は富岡製糸場主任となり、在仏時代の商人を介して仏技師ブリユナを雇用し、明治5年には操業開始させるのです。明治4年には蚕糸業推進の象徴の為、皇后の養蚕事業を農民出身の洪沢が主導する事にもなるのです。

ここに洪沢栄一は日本の近代産業を牽引してゆく偉大な人物となって行くのです。

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

二十二 板垣家子夫 2

専門は孫の子守と言はれつつ、まなぶた暇がるくとぢ給ひたり

『礫底』昭和二十二年

大石田のきびしき冬を思ふとき引き止められぬ君が  
み体

わが妻の作りし料理も最後まで言ひて食ひ給ふ鯉の  
甘煮を

題詞に「斎藤茂吉先生帰京 十一月三日、引上げ帰京  
する先生に随伴す」とある一連の前半部。作者によると、  
この前日、茂吉は親しくした人の家を暇乞いに回り「決  
して見送りに来ねでけらっしゃいっす、別れは嫌いやんだも  
んだからなっす」と見送りを固辞したという（『斎藤茂  
吉随行記・下』による）。

一首目は歌の配列からいうと前夜か当日の会話に基づ  
くだろう。汽車の中でも茂吉は「東京に行つてからは俺  
は何もしないことにして、茂一の子守をして遊あそぶるっす  
はー」と言っている。二首目には、大石田に引き止めた

くてもこの寒さと茂吉の体調を思うとき無理は言えぬと  
いう無念さが籠められている。三首目は出発の日を詠む。  
右の随行記に板垣は、「昼食は乏しいながらも妻の鯉の  
手料理を喜んで食べてくれた」と書いている。板垣は茂  
吉の帰京にただ一人随行したのに道中のことを一首も詠  
んでいないので、右の昼食の記事に続く文章を引用する。  
「三四日前のこと、来春あたたかくなつたら再び来ら  
れてはと言つた私に『東京に行けば来るえが来らんない  
が分かんないっすは。若し来るえどしても、君条件があ  
るっす。それ俺はこの通りの体だから何時ポクツと死  
ぬがすんないがらなっす。こんな時俺を直ぐ焼いて骨を  
小包にして送ってけるえっがす。東京まで持つてつたり、  
人から来てもらつたりしたつて、無駄な金を使つたり、  
大切な日を費しても何もならねっす。君、これを実行さ  
れがっす。』と厳しい口調で言われたのが、心痛く思い  
出されて食事を終つた」

秋の日の光り和める焼跡に藜あかぎ茂りて実をこぼしあつ

同

塀近く棕櫚ひと本が残りをり炎の中に保もちしいのち  
よ

焼跡に蔓の缺けを一つ拾ふ山口夫人に連れられて来  
て

この三首には「童馬山房跡」と註がある。板垣は道中のことや東京に着いた時のことは詠んでいず、こうして童馬山房跡を詠んでいる。上野に着き新宿を経由、小田急電車に乗るなどのことに神経を使っている歌どころではなかったかと思われる。三首目の「山口夫人」は茂吉門弟山口茂吉夫人であり、板垣は大石田に帰るまでの数日を山口の家に泊めてもらっていた。

板垣は世田谷区代田の斎藤家に着いたところを随行記に「門に入る前一寸立停まり、『此処だ、此処だ君、菊池寛の父帰るだ。』と笑いながら言い、それから玄関にツカツカと入って呼鈴を押し」と記している。そして、この日から三十三年後にこのことを、

代田の家の玄関に入るやいなや「父帰る」と弾める  
声に呼ばれし 『湧水』昭和五十五年

と詠んだのだった。

板垣は大石田に帰るや、茂吉を思う歌を詠み始める。

十二月十一日より降りし雪二日目にして四尺に余る  
『礫底』昭和二十二年  
孫君の手ひき遊ばむ世田谷の代田の道は霜にいたむ  
ころ

東京に帰られてはや月越えぬ大石田の夢見給ふや否  
や

雪の降る寒夜かぐやをさなく啼く鼻聞きにし人は帰り給ひ

ぬ

ふかぶかと雪に埋うもるる書屋にも行くことなくて年  
せまり来つ

混沌と深き嘆きを包蔵し詠まし給ひき大石田の歌最

上川の歌

大石田は屈指の豪雪地であり、この寒さの中で茂吉が大石田一年目に肋膜炎に罹ったことを板垣は自分のせいであると思ひやり続けているのだが、一首目にはその思いがあるだろう。二首目は、帰京を前にして、東京では「専門は子守」と言っていた茂吉の子守を想像している。四首目は、茂吉が「わが眠る家の近くの杉森にふくらふ啼けり春たつらしも」「梟のこゑを夜ごとに聞きながら『聴禽書屋』にしばしば目ざむ」(『白き山』昭和二十一年)と詠んだことを踏まえている。五首目では、茂吉が大石田に暮らした二年間を日ごと聴禽書屋に通ったことを思い出している。六首目の「嘆き」は、戦いに敗れた国のこと、「アララギ」の今後のこと、戦犯と呼ばれたこと、東京に住む家族のことなど、文字通り「混沌」とした茂吉の思いをいう。

# 楽しい時間 28

山本紀久雄

2015年1月31日

日本企業がミャンマー進出して成功した2事例を紹介したい。

## ㈱サイバーミッションズ

最初は㈱サイバーミッションズ。業種はITサービス・オフショアリングoffshoringである。2003年に資本金1000万円を横浜に設立し、現在の事業所は横浜とヤンゴンにあって、従業員は約100名。オフショアリングとは、先進国の企業が人件費や事業コストの安い新興国の企業・人材を活用して開発コストを削減するために行なうもので、当初は英語圏の国の中で盛んに行われ、その後日本を含む世界へ広まっている。

㈱サイバーミッションズはオフショアリングの流れは今後も成長拡大すると考え、いざれ高コスト中国から移行するだろうと、2010年12月にミャンマーを視察したところ、以



(サイバーミッションズのオフィス)

下の要素で進出を決断した。①時差が二時間半でWeb会議に支障がない。②親日的で日本人と感覚や考え方が似ている。③日本語の習得が驚異的。④優秀な人材が就職難。⑤人件費がアジアで最低。ただし、問題はインフラが不十分なことであるが、これについては「変えられない要素」人が素晴らしい。変えられる要素「インフラは時間で解決する」と分けて考え、ミャンマー進出を決断した。

もう一つの成功要因は、NATOではないこと。日本企業は現地で「ノアクシオン・トークオンリー」と揶揄されている。意思決定が遅いという意味だが、㈱サイバーミッションズは違う。2010年12月視察、2011年2月進出決断・登記申請、2011年10月研修開始、2012年4月営業開始と素早い動きで、有馬社長の眼力が成功要因であろう。

ナンカティン・・・シンピューレー「Sin Phyu Lay」(小なかわいい白象)

ヤンゴンのマーケット、ボージョーアウンサンマーケット、ここはボージョーアウンサン通りに面した2階建ての奥が広い市場。生鮮食品は扱わず、日用品や土産物を扱う店が多い。この一角に「シンピューレーSin Phyu Lay」(小さなかわいい白象)との企業名をつけた新谷夢さん(27歳)の小さな土産店がある。訪ねると新谷さんは留守だったが、店員がナン



カタインクッキー Nan Ka Hrang Cookies を試食させてくれた。結構上品な味である。

ホームページでは「ミャンマー伝統のナンカタインクッキーとは、古くからミャンマー人に愛されてきたもので、卵ボーロのような優しい口だけで、外国人も食べやすいように甘さは少し控えめにしています」とある。

これをお土産に2箱購入した。1箱7ドルで計14ドル。衛生状態がよくないミャンマーで日本人へのお土産をお菓子にするに、少し説明が必要だろう。

新谷さんは関西の大学で経営学を学び、卒業旅行で世界一周の一人旅をし、アジアの人や雰囲気魅せられた。卒業後は、地元香川県の銀行に就職。もうすぐ2年が過ぎようとしていたとき、父からミャンマー人の知人が日本人の働き手を探していると聞いた。銀行の仕事はやりがいがあったが、マイペースな性格には「大きな組織で働くのに自分は向いていない」とも感じていた。「面白そうだから？」という家族の後押しもあり、2012年6月にミャンマーへ。



現地では不動産会社に就職したが、「自分でも何かを始めたい」と考えた。そんななか、ミャンマーに遊びに来た日本の友人が「こっちはお土産にいいお菓子が無い」と言っていたことを思い出した。とにかく、ミャンマーに行くようになった途端、現地から以下の注意事項が飛んでくる。

(二) 個ずつフィルム包装

● 地元のジュースや露店での食べ物や飲み物を絶対に飲み食いし

たらダメ

- 生野菜も絶対にダメ（洗う水であたる）
- 歯磨きもミネラルウォーターで口をゆすぐこと。水道水使用はダメ
- 蚊がいるので長袖シャツ着用

というように衛生環境だから、ミャンマー土産としてお菓子を買ひ、日本人に差し上げ、お腹を壊されたら問題なので、食べ物には買えないと考えてしまうというのが、日本人旅行者の基本的パターン。

しかし、このところ急速にミャンマー訪問が増えた日本人対象に、環境面をクリアすれば、お土産に欲しいと思う人はいるはずだと確信し、その決断をしてからは、信じられないスピードで物事を進めた。

まず、ミャンマーの伝統的なバター風味のクッキー「ナンカタイン」を日本人のテイストに合わせてアレンジすることにした。地元で評判のベーカリーを訪ね、製造をお願いした。商品パッケージは日本に発注。パッケージの制作と印刷は、ミャンマー語の家庭教師に付き添ってもらい、街の印刷会社を一軒一軒回って探した。

出上がった商品を日本企業が多く入っている商業ビル「入り口付近にショークース」置かせて貰った。起業を決めてから、わずか4カ月であった。良い土産物がないと困っていた駐在員たちが、口コミで広めてくれ、「地球の歩き方」にサンプル商品を送ったら、掲載されたことも大きかった。やはり、日本人が安心して買えるお菓子というマーケットコンセプトが日本人訪問者に受け入れられたわけ。私も当然に買って、日本へのお土産にした次第。

転載 『月虹73号』

## 一首鑑賞

鮫 島 満

人が人を裁くより他なくあやまてる三十四年を人はかへさず

御津磯夫 『月下の華』(白玉書房)

作者はアララギで斎藤茂吉、土屋文明に師事、のちに「三河アララギ」創刊・主宰した。

右の一首は昭和五十八年の作。下旬の「三十四年を人はかへさず」から逆算すると、昭和二十三年に起きた祈祷師夫婦殺害、現金強奪の罪で翌年に犯人とされた免田栄さんが逮捕された(免田事件)を詠んだものであることがわかる。

免田事件の、逮捕から無罪判決までの流れをものの本でたとると次のとおりである。

昭和二十四年 免田栄(当時二十三歳)別件で逮捕される。

昭和二十五年 熊本地裁八代支部で死刑判決言い渡される

昭和二十六年 福岡高裁、免田の控訴を棄却する

昭和二十七年 最高裁、上告を破棄して死刑確定を言い渡す

昭和五十四年 六回目の再審請求が承認され、死刑囚初の

再審が開始される

昭和五十八年 最高裁で無罪判決言い渡される

この判決をきっかけに「財田川」「松山」「鳥田」の各事件が再審で死刑囚の無罪判決が相次いだ。

提出歌は、罪を裁くのは人によるほかはなく人が人を裁く以上は常に冤罪の危惧を免れ得ないという真理を踏まえたうえで、この度の事件では無実の人を三十四年も罪人として拘束、その人生を奪ったが、「人」はこの三十四年を償うことは決して出来ないのだという恐ろしい真実を詠んでいる。作者が「人」というとき、司法という国家権力に委ねる外ないすべての人間を意味しているだろう。もしここに怒りを感じるとすればそれは他人に対してではない。

「人が人を裁く」というとき思わずにいられないのは平成二十一年五月から始まった裁判員制度である。裁判員が担当する項目には、「死刑又は無期の懲役・禁固に当たる罪に関する事件」があるから裁判員になった人の多くが苦しんでいるのは当然だろう。誤判で思い出すのは、十七年間の拘束の果てに無罪が確定(平成二十二年三月)した(足利事件)の菅家利和さんのことである。そしてまた名張毒ブドウ酒事件の行方が話題になっている。

掲出歌にもどるが、これは無罪判決が確定した直後に詠んだ時事詠である。事件名も人名も詠み込まずに、事件と作者との関係に何らかの抒情を必須とする時事詠のあり方を実践している点で手本にすべきみごとな作品である。最近の時事詠が、事件を即物的になぞったり自分の主張を性急に主張することに終始したりしていることを思うとその感はいっそう強くなるのである。

転載 『月虹99号』

一首鑑賞

保坂征子

さくら剪る馬鹿になるとも咲き始めの一枝をベッドの吾  
嬢の手に  
『続御津磯夫歌集』

平成四年に出版された一、六二三首から成る歌集の中の一  
首である。後記に「アララギ会員の七十年、三河アララギ創  
立六十周年。恵まれてここに九十歳（以下略）」と簡潔に記さ  
れている。

集中には作者と妻の病と老いが多く詠まれている。日々の  
刻々が丹念に掬い取られた一首一首である。

提出歌の「桜剪る馬鹿」は、梅剪らぬ馬鹿と続き桜の季節  
よく耳にするが、実際は梅も桜も時期を見て剪定されてい  
る。花あるうちは剪らない方がよいというほどのことであろ  
う。その咲き始めたばかりのさくらの一枝を手折り、病床の  
妻の手に、という歌である。いやまだ病床とは判らない。

点滴と酸素との命と言ひあひつつ今こそわれらは無為  
の極楽

わが嬢は夜々の注射にねむり足りて庭など歩く夢を見  
つづく

夫婦みてすでに一年を苦しめりわれも苦しむいで入る  
呼吸に

病人を診て来しわれの一生のはて遂にわが診るつまの  
一人を

一首目の「言ひあひつつ」には、二人ともに病を持ちなが

らもまだ会話ができていたことが伺える。二首目には妻がも  
はや注射でしか眠れなくなったことが、三首目では「すでに  
一年を苦しめり」にその妻を病の苦しみから解き放してやり  
たいとの思いが感じられる。四首目には、開業医として大勢  
の病人を診てきた作者が、最後に最も大切な妻を患者として  
診ることになった現実を淡々と詠んでいる。「遂に」一語に  
作者の思いが籠る。

深刻な状況であるにも拘らず、暗く切羽詰まった印象がほ  
とんどないのが不思議である。これは事実だけを詠んでいる  
こと、夫としての、歌人としての、何より医師としてのそれ  
ぞれの視点が定まっているからなのだろう。

これらを背景としてもう一度提出歌を詠んでみる。ベッド  
はやはり病床であり、結句の言いさしの「嬢の手」は、もう  
さくら一枝を握ることも受け取ることもすらできなかつたの  
かもしれない。

話は少し逸れるが「月虹」九十六号の「おもしろ短歌」に  
取り上げられているのが同じ作者の作品である。もうひとつ  
気がかりあり、更に遡ったところ、七十三号で鮫島さんの取  
り上げた一首が、同じ御津磯夫の作品であった。冤罪に関わ  
るもので、歌、解説ともに重い内容であり印象も強く記憶に  
残っている。ただ作者名を思い出せずにいた。そうか、同じ  
作者だったのかと束の間感慨にふけてしまった。もうひとつ  
の気がかりは、気がかりそのものが何であったか未だに思  
い出せないでいる。

集中にはこんな歌もある。最後に。

湾岸危機などわからねど戦ひに征きしわれはただ憂ひ  
もつ

## 梅 夏目勝弘

梅の季節になると思い出すのは長塚節のことである。  
○杉の葉の梅の木にして懸れると見つゝ、佇むそのさゆらぐを  
(明治四十五年)

明治四十四年十一月二十二日喉頭結核と診断され、手術・  
黒田てる子との婚約解消。

明治四十五年三月七日、帰郷し、梅の剪定をするとある。  
たぶんこの時の一首であろう。

年譜では十七日上京正岡家を訪問。十七日漱石を尋ね九州  
帝国大学の久保猪之吉博士への紹介状ももらい、十九日東京  
をたち名古屋を経て月ヶ瀬で観梅伊賀上野にも立ち寄る。

長塚節の生家を尋ねたとき、書斎に面した庭に太い二メー  
トル余りの梅の古木の枯れた一本が、斜めに書斎に向いて残っ  
ていた。

七日に帰郷したおり剪定をした梅であろう。枝先は書斎の  
軒まで伸びていたと思う。その枝に杉の枯葉が懸つて揺れて  
いる。

○我がさとはかくしもありき庭にして落葉掻き集む梅さへ散  
るに

屋敷林をなす生家の木暗らき庭を歩いたことを今思い出し  
ている。

月ヶ瀬・伊賀上野での短歌等はない、大正三年の「鍼の如く」  
まで歌集には歌は載っていない。

明治二十九年(十八歳) 中学四年進級後に脳神経衰弱とな  
り退学。塩原温泉で二ヶ月間滞在、この時に正岡子規のこと  
を知る。

明治三十一年(二十歳)「日本」に二月十二日より「歌よみ

に与ふる書」が連載される。節はこれを熟読・切り抜く「百  
中十首」を規範にして、写生の歌を学び始める。

明治三十三年(二十二歳)

「日本」紙上の短歌の募集の第二回に節の二首が入選。「新小説」  
の懸賞の和歌「雪中梅」に番外で掲載された。

「日本」に入選を機に、子規に指導を受けることを切望し、  
三月二十七日根岸庵に子規を訪問。四月一日の根岸短歌会の  
出席、ここで伊藤左千夫と合う。

節が十八歳で和歌を作り始める。

○此のあさけ世は白妙にかはれるを紅に匂ふ梅の優しさ(雪  
中紅)

○風寒み降る白ゆきと我が見しは遠里小野の梅咲けるなり

明治三十一年より写生の歌を学び始め三十三年に作った梅  
の一首

○梅の木の花さく枝にかゝりたる杉の枯葉は竿もて払いつ

「新小説」で番外で載った「雪中梅」

○睦月七日寺島村によぎりきて雪かさきたる梅あるをみつ

明治三十四年(佛前に梅を供ふ)

○三佛にたてまつらむと庭にある梅の初花手折りつるかも

○手折りきて瓶に活けたる梅の花の久にたのまむ三代の佛に

明治三十五年(二十四歳) 九月十九日子規の訃報に接し葬  
儀に参列。

長歌を作り始める。その短歌

○雪降りて寒くはなれど梅の花散りまく惜しみ出でゝ来にけ  
り

明治三十八年(二十七歳) 旅行が多くなる。

○木の葉掻く木の葉返しの来てあさる竹の林に梅散りしきぬ

明治四十五年(帰郷した後、大正三年の鍼の如くまで歌を  
作ったことはなかった。

## 「氷魚」のことから (170) 岡本八千代

ついに、平成27年を迎えることができた。今年は私にとつて、またまた嬉しいことがあった。それは、松山の子規記念博物館長の竹田美喜先生から、頌春のお年賀をたまわったことだ。その葉書には、短冊に寒梅らしい美しい絵があつて、「客かたづくる鏡小さし春寒み」の一句が添えられていた。そして、句の下に、「為山句画」とあつた。

さつそく調べてみると、作者は、下村為山のことと思つた。なぜなら、今、一月三十一日まで、子規博物館では、為山の特別展を開催中とのこと。為山という人は「慶應元年、松山生。名は純孝。洋画家。俳画をよくして、「新俳句」等の挿絵を描いた人。子規の初期の俳句運動にも参加。牛伴の名で句作。一時松風会指導者。昭和24年歿」と。(子規全集11巻月報Iより)ああ松山へ観にゆきたいなあ。その心のままに、前回の続きを書こうとする。

子規の少年時代は、ちょうど廢藩後なので何かが変わりつつあつた。

その頃、子規のために、一室の書齋が新築された。それはわずかに三畳の間にすぎなかつた。家族は三人暮しで狭くはなかつたが、母親が近所の女の子に裁縫を教えていたので座敷は終日ふさがっていたのだつた。だから建てたのである。

・「書齋には、五友先生の筆になる『香雲』の額がかかっ

て居た。これは庭に松山には稀な桜の大木があつたに因るものであつた。書齋の庭にも色々の草花などが植えられて居た。子規は香雲或は桜庭とも号していた。」と良さんはいう。

・この三畳の一室は今松山の子規庵として遺髪塔のある正宗寺に移して保存されているということだ。

・「この書齋が出来た年月は忘れたが、子規が中学へ入學する頃だつたらう」と良氏。

・この書齋の部屋は、爾後彼の道場になつた。彼は片隅に机や本を置き、その他に本や紙などを散らかして、他の者には一寸足をふみ入れる余地さえないのが普通であつたという。まさしくこの頃から「癡だうさい祭書屋しよやく」的な様相があるような。

・この頃、五友たちの話題によく上つた人に内藤素行という人があつた。この人は県の学務課長で、漢学者、詩人だつた。

・子規たちは、東京で出るえいざい韻才新誌という少年雑誌を読んでいた。松山でも武市という人が、この本を出して、内藤さんの詩がよく載っていた。内藤さんは非常に読書家であり、一晩で日本外史を読んできましたとか。子規は「よし自分もやる」といつて、あの書齋で試みたほど。子規は、「五友雑誌」「莫逆雑誌」「桜庭雑誌」など称したりして、論文、記行文、漢詩等も載つて、欄外に無遠慮な批判を書き時々討論になつたこともあつた。

次回へ

ことのはスケッチ (435) 今泉由利

『天田愚庵』② 天田愚庵と正岡子規

明治二十八年、神戸の病院を出て、東京に帰る途中、子規は歩くのに少し困難を感じつつも、奈良に遊ぶ。

大仏殿の中門に向って右側、鏡池の上にさし出して建つ『角正』に宿る。

宿の仲居に「まだ御所柿は食べられますか」と。仲居は、錦手の大井鉢に山のごとく柿を盛り子規のために、せつせと柿をむくのだった。

柿も旨い。場所も良い。ポーンと釣鐘の音。

「長き夜や初夜の鐘撞く東大寺」

「大仏の足元に寝る夜寒哉」

陸羯南、始めて愚庵に合ったのは、愚庵が仙台中教院で、落合直亮の国学、歌道の講義を受けた、その時の同窓生、国分青厓を訪ねた頃。

陸羯南が愚庵の京都の林丘寺を訪ねたり、愚庵が法月で東京に出、陸宅を宿したり。また愚庵は、東京蔵前回向院の大相撲（梅ヶ谷、常陸丸の時代）を観戦に上京。初日から千秋楽まで、陸宅に泊まった。

陸羯南との縁で、根岸に住みはじめた子規は、

「鶯のとなりに細き庵かな」

「鶯の遠のいてなく汽車の音」

「涼しさやわれは禅師を夢に見ん」

「衣更へて愚庵を訪はん東山」

愚庵は子規に

「園中の柿秋になり候はば一筐<sup>か</sup>差上可申と今より待居候事に緩々御保養可被成候」

子規

「十二勝已外にうまさ柿の木も御庭に有之候趣にて此秋は御送被下候との事待居申候」「柿の実は鳥に落させぬやくれぐれも御願申上置候」

愚庵の庵に長く滞在していた「湖村」が東京へ帰るにあたり、柿を子規のもとへ持参した。子規は小説執筆に紛れ、暫く礼を怠った。愚庵は子規に、礼無きを責める歌を書いた次第は

（「天田愚庵」①に記載）

子規

「祇園の鴉愚庵の棗くひに来る」

「野菊持ちし女の童に逢ひぬ鈴鹿越」

この句を、子規は愚庵の「巡礼日記」に依って作った、と「試問」に書とめている。

愚庵全集より「子規宗匠」

「まだ死ぬな雪の中にも梅の花」

「独りしていそぐ旅かな雪のそら」

「こたつして君和韻せよ十二勝」

子規は、陸羯南の新聞「日本」に「歌よみに与ふる書」を連載。明治二十一年このかた子規の作りつづけてきた歌は一変した。丸山作樂より天田愚庵に伝えられた万葉調の歌は子規の和歌革新運動となった。歌壇などとは没交渉、独り静かに歌を詠んでいた愚庵の存在は、子規に大きく影響した。

愚庵没後百年行事の「いわき市」に、子規の「柿熟す愚庵に弟子も猿もなし」と句碑。京都愚庵邸より「ゆかり」の柿の木が移植された。

# 「歴代天皇御製歌」(三十四)

貫名海屋資料館

『三条天皇』第六十七代・在位一〇二年(三十六歳)―一〇一六年(四十一歳)

三条天皇は、冷泉天皇の第二皇子。藤原道長権勢の御世。

天皇は、中国で不老不死の妙薬とされた(硫化水素、硫化砒素を含む)仙丹の服用直後に、ほとんど視力を失い、後一条天皇の即位に従い退位された。

心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半よはの月かな

(後拾遺集卷15・雑1・860)

(退位の際に詠まれ、小倉百人一首に在る)

辛く悲しい現世を思うとき、今宵の月がいつか恋しく思われるだろうなあ…

秋に又逢はむ逢はじめ知らぬ身は今宵ばかりの月をだに見む

(詞花集 97)

皇后に詠まれ、せめて今夜の月だけでも…

## 編集室だより【二〇一五年 一月】

◆三河アララギ賞 青木玉枝様

泣くもよし笑ふも怒るも味はひて手合わせ祈る日びおだやかに

激動をやさしく祈りにされましたこと、内面的にも外面的にもおみごとです。

○新年初、国内最大級のEDM系「electro」、二万人を超えるNEW・YEARS・MEGAPARTY! 幕張メッセを大音響にしました。玉由が関わっていて、私も「光りと大音響」に身をゆだねたのです。若返った。

○ネットで調べ、調べたい本があると「中央図書館」に行く。ここに無い時は、東京中調べて探し出し、取り寄せ、そして貸して下さる。なんとありがたいシステムです。費用はかからないのです。

1928年のもうどこにも無い本が、国会図書館にありました。この本はあまりに古く映像になっています。私には近い図書館のパソコンで一日中でも、読んで居られるのです。

○銀座の「よし田」老舗のそば所。鴨とねぎの鍋をいただく。シャブシャブ風に、煮え過ぎないように注意して、同じ鍋であたためた。「そば猪口」のタレをつけていただく。静かに静かに美味でした。

○美智子皇后様のところにだけ残る「国産かいこ小石丸」を育まれておられる映像を拝見していました。あまりの美しい情景に浄化されるのでした。

○天照大神・豊受大神祭神の芝大神宮にお参りしました。続いて、ペリー提督の碑、増上寺、東京タワー、有章院、芝公園、将軍御成門、烏森神社。日本を知るのでした。

○仏像彫刻にゆく「八潮コミニティ、セントターの食堂の薬膳カレーが美味しいです。2時から始まる授業の前に、このカレーでパワーを得て彫っています。

○バルセロナとAマドリードのサッカーを見ていた。ニューヨークで仕事中の玉由に、メッシがPKを入れたとのついでに「メッセージ」を送り、試合を楽しんだ。

○東京国立博物館・みちのくの仏像展にゆく。戦いで…災害で…命を失くした人をなくさめるため。

一本の木から彫る一本造りの仏様。寄木造りの仏様。彫られたままに刀の跡が残っている仏様。隣のおじさんのようなお顔の仏様。土着と信仰とまじり合った、寄り添っていたい仏様達。

○キャプテン・クック探検航海と「バンクス花譜集」展。キャプテン・クックの1768年から約3年間に渡る、太平洋航海、大西洋から南米のブラジル、太平洋の島々を経てオーストラリア・ニューギランド、ジャバを巡りイギリスへ戻る航海。バンクスは、画家シドニー・パークインソンを同行、現地での数々の植物を描かせ、それをもとに「バンクス花譜集」を出版。日本では見る事のなかった「植物の図」に気が転倒した。

## 和菓子街道（101）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

### 伊勢街道(24)

外宮から内宮へ向かう途中、かつては近在一の大遊郭街だった古市を通る。昔は遊郭のほかにも、料理屋や浄瑠璃小屋、射的などの娯楽場が建ち並んでいた。そしてもちろん、甘いものを出す茶店も。

中でも、桜木町南端にあった長嶺茶屋は、古市がまだ長峰と呼ばれていた頃から日参茶屋を営んでいた古参の店だった。木下姓だった頃の豊臣秀吉も、主君織田信長の代官として神宮の宇治橋造営の

橋奉行を務め折りなどに、この茶店で餅菓子を食べたといわれている。

そんな歴史ある長嶺茶屋も、先の大戦を機に廃業。しかし、これを惜しんだ伊勢の観光協会の肝いりで、昭和34年に発足したのが太閤餅だ。現在は内宮の宇治橋のすぐ近くに店を移して秀吉にちなむ太閤出世餅を売っている。秀吉が食べたのは、半月状に折った焼き餅だったようだが、現在では満月のように丸い焼き餅だ。消えゆく歴史の一角が繋ぎ止められたのだと思うと、焼き餅にも一層の温もりを感じる。



秀吉にちなんだ焼餅。

#### ◆太閤餅

住所：三重県伊勢市宇治今在家町63

## お知らせ

▽四月号の原稿は、三月一日(日)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早日に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

### ▽長谷川千代作品展

「インドの布に魅せられて」

3月18日(水)～3月24日(火)

浜松・遠鉄百貨店7階アートサロン

### ▽「ワイルドシルク・フェスタ」

4月2日(木)

豊橋・ほの国百貨店6階季節の催し会場

## 編集三河便り

春が来たような暖かい日が二・三日続いたと思っていましたら、今日は一変、真冬の寒い日となりました。この天気は三河地方に限らず全国的のようでした。一日外にも出ず、メ切りが追っているため歌作に没頭しています。作りおいた歌がないため、まさに「作る」作業です。「創る」ということはありませんが、過去のことを思い出しつつ歌を詠むことはあります。そんな時、御津先生の「お話しになっはてはダメだ。」という言葉を思い出します。そこで私は、「お話し」「報告」にならぬために過去に立ち返る作業をします。その時の眼、その時の思いに返るのです。そうしてリアル感、新鮮さを表せる努力をします。

いづれにしても一日一首一首、あるいはメモだけでも取ると毎年年初に誓いを立てるのですが実行できません。今年こそは！

平松

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半々年分一万円、一カ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半々年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知されたい。退会の際も同様たたちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十七年三月二十五日印刷 第六十二巻 第三号  
平成二十七年三月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘

### 発行人

平松 裕子・山口千恵子

### 発行者

今泉由利

### 三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒一四一〇〇三二

東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一〇二〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

UR L E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

### 印刷所

株式会社 桜 創 美